

草づれつ和令

外交評論家・元外交官

金子熊夫

kaneko@eeecom.org



日越友好関係の歴史と反省

人間は長く生きていくと、病気以外で思いがけぬ事故や事件に巻き込まれて、危うく死にそうになった経験が一度や二度はあるのではないかと思います。私の場合も、長い外交官生活でそういう経験が再三ありましたが、その中で最も危険だったのは、今から半世紀以上も前、ベトナム戦争の最盛期に旧サイゴン（現ホーチミン市）の日本大使館で勤務していた時でした。特に1968年2月、

ベトナム戦争のハイライトとも言うべき歴史的な「テト（旧正月）攻勢」の際に、たまたま出張先の中ベトナムの古都フエで、猛烈な市街戦に巻き込まれ、まさに一命を落としたかと思いました。往時ですが、あの時の極限的な体験だけは決して忘れられません。

なぜベトナムは親日的なのか？

ていなければ政治に興味を持つこともなく、政治家になることもなかっただろう」と述懐していただきました。それほどベトナム戦争は異常な経験であり、私の人生にとっても大きな出来事であったことは確かです。

最初の訪越
日本人は
阿倍仲麻呂
日本とベトナムの関係

は、古い時代については必ずしも史実がはっきりしていませんが、最初に訪越した日本人は奈良時代の阿倍仲麻呂だろうといわれています。百人一首の「天の原 ふりさけみれば 春日なる三笠の山 出でし月かも」の歌で有名な彼は、奈良時代中期に遣唐使として中国に派遣されました。しかし、途中で船が漂流し、安南（現在のベトナム北部のクアン省あたり）に上陸。後に唐王朝の官吏となり、安南節度使に任命（766年）されたといわれています。

止により、日本人の海外渡航はストップしましたが、西欧の大航海時代、日本の豊臣・徳川時代に、勘合貿易が盛んになり、日本人の東南アジアへの渡航が増加。例えば静岡出身の山田長政がシヤム（現在のタイ）で活躍したのと同様に、中期に、京都の豪商で徳川家康の御用商人であった茶屋四郎次郎は江戸時代初期にベトナムへ渡り、中部ベトナムのホイアン（タナンのすぐ南）を拠点に貿易商として成功し、巨万の富をなしたといわれます。現在でもホイアンには、当時の日本人の墓が点在しています。念もたしがたく、墓石はいずれも故郷の日本の方角を向いて建てられています。



ホイアンの「遠来橋(日本橋)」
=ウィキペディアから

(2面に続く)

令和つれづれ草

金子熊夫

ファン・ボイ・チャウと東遊運動

次に日越の人的交流が復活するのは、日本が開国した明治維新以後で、特に日露戦争（1904～05年）で日本が勝利したから、アジア諸国の有為の若者たちが「東洋の大国日本に学ぼう」と多数来日しました。当時アジアの多くの国は西歐列強によって植民地化され、その圧政に苦しんでいました。とくにアン

たので、フランスの支配から脱するため革命運動を起そうとした若き民族主義者たちが次々に日本を頼ってやってきました。その中で最も有名なのはファン・ボイ・チャウ（潘佩珠、1867～1940年）で、ホー・チ・ミンより1世代前の革命家ですが、彼は、ベトナムの若い革命家を日本に留学させるための「東遊（トンス）運動」の先頭に立ち、1905年に初来日し、犬養毅、大隈重信などの有力政治家に会って援助を求めました。

この時期、財政的に困窮していたチャウに親身の援助の手を差し伸べたのは、静岡県（現在の袋井市）出身の医師、浅羽佐喜太郎（1867～1910年）です。二人の親密な交友関係は最近テレビドラマにもなっているので、存知の方も少なくないでしょう。なお、佐喜太郎の郷里、袋井市浅羽町の定林寺には、佐喜太郎没後チャウがひそかに再来日して建てた報恩・追悼碑が建っている（ぜひ一度見学してみてください）

ところが、こうした個人レベルの友好関係にもかかわらず、当時の日本政府はフランスと日仏協約を結んでいたため、フランス側の要請に応じてチャウを国外追放。傷心のチャウは恨みを抱いて日本を去りました。この出来事は、現在の日越友好ムードの中で忘れられたエピソードになってしまいましたが、我々日本人としては心にとめておくべきことでしょう。

なぜベトナムは親日的なのか？

周して遠征してきたロシアのバルチック艦隊が最後に寄港したカムラン湾において、親日的だったベトナム人が補給などでサボタージュし、石炭に泥を混ぜたことが日本勝利の一因だったとも伝えられます。こうしたことも日本人として知っておくべきでしょう。（バルチック艦隊のカムラン湾寄港については、当時日英同盟を結んでいた英国が事前に裏でフランスに圧力をかけたり、妨害し

ていたという説もあります）

大東亜戦争時の日越関係

次に日越が直接関係するのは大東亜戦争（太平洋戦争）の時です。前回の本欄（1月17日）で触れたように、日本軍は日米開戦の1年半前に、当時仏領インドシナ（仏印）と呼ばれていたベトナムの北部（ハノイ周辺）に進駐。その1年後の1941年7月、つまり真珠

湾攻撃の5カ月前に、南部ベトナム（サイゴン周辺）に進駐しました。これは米英側からすると決定的なレッド・カードだったわけで、その結果米英等との関係が一気に悪化し、日米開戦につながったことは前回説明した通りですが、日本側からすれば大東亜共栄圏を確立するためには戦略的に重要なステップでした。しかし、実際には、当時フランスはヨーロッパ戦線でドイツに完敗し、日本とアジアで戦う余力が無かったため、日本軍は事実上全く抵抗を受けずに進駐しました。だから、ベトナム本土ではほとんど戦闘は行われず、ベトナム人に危害が及ぶことはありませんでした。その点で、日・米英の激戦に巻き込まれ甚大な被害をこうむったフィリピン、シンガポールなどは異なり、日本軍はむしろベトナム人から歓迎されたようです。（た

だ、ベトナム在住の中国人、いわゆる華僑の中には蒋介石シンパがいて、彼らが日本軍によって擄奪され、場合によっては殺害されたケースもあったことは確かかなようです）

さらに、1945年8月15日に日本が連合軍に降伏し、軍隊がベトナムから引き揚げた後も、一族から体験談を聞いた記憶があります。なお、上皇ご夫妻が2017年の訪越時にこれら現地家族と特別に会われたことはご存知の通り。

195年の「大飢饉・餓死200万人」の真相

大東亜戦争中の出来事も一つ、日本ではあまり知られていない重要な「事件」に触れておきます。

日本政府代表が東京湾内の米戦艦「ミズーリ」上で降伏文書に調印した同日の9月2日、ハノイでホー・チ・ミンは独立宣言を読み上げました。その中に、「戦争末期、ベトナムで約200万人の餓死者が出たが、それは主に日本軍がベトナムの農村でコメなどの食料を徴発したためだ」という趣旨のことが明記されていることです。200万人というのはあまりにも多いし、どこまで事実か不明で、日本の学者・専門家の間でも疑問視する向きが少なくないようですが、私自身もこの「事件」についてはベトナム政府や共産党の有力者から直接聞いたことがありません。ホー・チ・ミンは日本でいえば明治天皇のような存在で、彼が自ら起草したといわれる独立宣言は五か条の誓文か明治憲法のようなもの。真偽はともかく、ベトナム人なら必ず読んだことがあるはずで、そのこと自体を無視するわけにはいきません。日頃ベトナム人は決して口にはしません、日本人としては頭に入れておくべきことだと思えます。

（以下次号に続く）

元キャリア外交官。ベトナム戦争最盛期の1966～68年、旧サイゴンの日本大使館に政務書記官として勤務。退官後東海大学教授、ハノイの日本研究センター教授、日本ベトナム協会理事等を歴任。新城市出身。85歳。



ファン・ボイ・チャウ（ウィキペディアから）



ホー・チ・ミン（同）